**第12章　事後学習ワークシート**

以下は第12章のまとめである。第12章の本文，コラムや指針・要領を見ながら，空欄を埋めよう。

幼児期後期から児童期前期は，幼稚園・保育所での（　　）を中心にした学びから，学校での系統だった学びに移行する時期である。幼児期後期からは特に3つの資質（　　　　　　　　　　　　　）と10の姿（

）を子どもたちの具体的な姿として考え，保育に取り組む必要がある。

また子どもは就学前施設から小学校へと学ぶ場を変えていくのであるが，そこに学びの連続性がなければならない。移行期のプログラムとして（

）が2022（令和4）年度から各自治体で取り組まれている。10の姿を就学前施設と小学校で共有し合い，円滑な移行を進める目的がある。

児童期前期，言葉の面では文脈を共有した親しい人の間で交わされる（　　　　　　　　）から，書きことばを含めた文脈を共有しない不特定多数の人との間で交わされる（　　　　　　　　）への移行が重要な課題である。

認知・思考の発達において，ピアジェの発達段階でいえば，児童期前期は前操作期から（　　　　　　　　）への移行期である。保存の概念を獲得し，論理的な思考が可能になる。

また，学習に必要な目標を持ち，それに合わせて思考や行動を制御していく（　　　　　　）や，自分の行動をモニターし適切にコントロールする（　　　　　　）の働きは，幼児期後期にはある程度発達している。こうした力は学校での学習において非常に重要である。

道徳性の発達は，善悪の判断等の（　　　　　），他者のため動く，（　　　　　），共感や罪悪感等の（　　　　　）が研究されてきた。

ピアジェは，幼児期の子どもは善悪の判断において，動機ではなく，結果を重視して判断する（　　　　　　　　）から，児童期半ばには（　　　　　　　　）へと移行するとした。また，（　　　　　　　　）は，ジレンマ問題を使って道徳性の発達段階を提唱した。道徳性の発達段階において，幼児期の子ども達は親等の権威に従う（　　　　　　　　）とされる。